

昭和14年11月1日（水）

朝冷ゆ。此日より電報開始八時となり、朝も一時間繰下げ五時起床に改む。快晴。出勤の途次、朝吹氏に飯沼の前にて出会う。昨僅かに一件を獲たるに過ぎず、申込書を受取りしも、送付書添属なく発送し能わず、再び持戻る。朝吹氏三十日には五件を獲たるに反し、甚だ不出来なりし。先月計75。

昭和14年11月2日（木）

快晴。偶々降雨せし日はあるも、比較的好晴に恵まれ、秋収穫に多大の好影響を齎（もたら）し、能率倍加進捗をみる。昨日販宅の際、豊後町局に立寄り局長に面接、鶴居局長未照の件を咄す。猶二日局長会を耶馬溪倶楽部に開催のことに決定、席上通告ある筈。曩に局長会は四日土曜日と指定したるが、余が不出席を認め、二日に繰上げたる如し。朝吹氏はカード整理三時頃まで。三疊の日向に座を占め、赤坊の紫外線浴は遂に徒労に終わりしと、愛子の述懐。余夜に入りて販宅、不相変手不足なるも、幸に巖居り窮状緩和を見る。赤坊に夕食を摂らし居る、余其の間に夕食を済ます。夜電気炬燵す。此の朝赤坊泣き続け、巖小母車に入れ何れにか行く。余此の間に朝食を終わり、巖を物色す。冷氣強く赤坊冷ゆとて販り来る。乃ち余負ふて新聞を見、一頁を終わって販宅、朝食を摂らす。九時前十五分出発。行賞報告は提出せぬこととす。何等効績の認むべきものなければなり。耶馬溪線乗り組女車掌の多額貯金預入れを、是永氏国債に振代え方慫慂す。余の為に当てがわれたる百円券二枚不足す。乃ち調査課に電話し不足分送付せしむ。仍って残四枚と現金四百十二円を受取り、大急ぎで汽車に乗り

込む。局長会に出席したるも、正午過ぎ問題終わりと同時に飯局したり。博多駅にて東唐津行き発車迫れりとのことにて、割合早く飯宅し得べしと信じ、直に乗込みたるに、箕島駅を通過、平尾まで行き、急がば廻れを地に行きたり。7銭かかる。線路伝いに飯宅す。十五分遅る。ガラ欠乏、市内に売物払い底とあり、恐慌を演じ居る。通信購買に注文す。道子は国債百円券四枚と四百十二円渡す。拾円余に呉れたるも受取らず。洋服修理代二円丈け出金して貰ふ。夜湯暖房して貰ふ。久子六時頃飯宅。此夜割合暖かなり。

昭和14年11月3日（金）

此日晴れ、時々曇り。午後よりは全く曇り、雨模様の儘暮れ行く。明治節とて外出、郊外に杖を曳く者多し。道子澄子筑紫耶馬探勝の挙に出でんとし、時間遅れ方向転換、西公園に行く。余市場まで行き黒胡麻9、白玉粉18求め来る。野口氏、妻女と認めらるる女子供連れ婦人挨拶さる。余一揖（いちゆう）して過ぎぬ。四時半道子等飯宅。杉屋記念売景品券、全市に配る。二枚貰ふ。今日引換え、湯呑み二個を得（一筥に付き大小二個づつ入る）道子夜食を摂らず、西公園への握り飯二個宛てにて満腹したるらし。夜林檎五20、葡萄20求めさす。此の夜温暖、湯暖房不必要にて前に飛出す。

昭和14年11月4日（土）

夜半より降雨、朝に至るも歇まず。道子澄子市場に行き、鯖求め来る。赤甘藷三百匁10、余の注文は赤色藷なるに、白藷のみ市場に出て居る。十時を過ぎ雨歇む。十一時頃より快晴の兆しあり。郵便局に年金九円受取りに行

き、「まこと」誌中尾氏に送る。昨日手紙と共に発送を洩らせり。夜甘諸頂く。七時二十分光友会かかり行く。松尾、栗原、山崎未亡人先着、会計引継ぎを了す。森、福永（病未癒）、柳原先生も見ゆ。天香師の旅費として、山崎氏寄贈百円の内50円、桑原氏に送金依頼。立看板拾五円（3）、これは従来 of 会費より支出のこととし、五拾円は会 of 基本金に据置くことに決せりと。天香師は九日長崎より当地着、正午は山崎氏邸にて食事 of 世話をされ、五時より海軍炭坑に、七時より福日講堂にて一般 of 聴講を許し、星野先生邸に泊。十日は光友座談会 of 順序。十一時半帰宅。暖房準備、蒲団敷きてあり。此夜速達便にて国債到着せりと。

昭和14年11月5日（日）

快晴、小春日和。裸体紫外線に浴す。下帯洗ふ。午後三時、松尾栗原両氏徒歩来着。寄付金五拾円を集める上に於いて、相談に見ゆ。松尾、星野、島井、具島氏等、拾円出資。余三円出金。栗原氏一円と申出らる。貯金通帳印章、松尾氏に保管を托す。林檎一ヶづつ出す。三十分計りにて辞去さる。四時頃より曇り、気温暖かなり。夜暖房を入れず。理髪す。

昭和14年11月6日（月）

晴れ。南新町にて電車を俟つ、七八分漸く間に合ふ。新聞購入 of 余裕なかりし、行橋にて求め5銭とらる。機動演習従軍記者より、後納新聞四通 of 発信あり。本局にても取扱い of 経験なしと云ふ。使送せり。ラジオシャープ一台送付越せり。機能を調べたるに出現せず。五時過ぎ飯る。巖帰宅し入浴しあり。赤坊は余が入れる。夕食は浴

後、赤坊の分は巖に任す。新聞完全に見ざりし為、八時より見初む。

昭和14年11月7日（火）

晴れ。ラジオの機能試験の為、中井に持行き診て貰ふ。調子良好の評あり。嘗ての真空缶代40銭支払ふ。帰りに警察に立寄り、岩上部長を訪ふ。所長室に在り、待つこと一時間電話にて回答を求めて戻る。後刻岩上氏臨局、関係書類を携行、再度臨局。是れに依り仔細報告す。五時戻る。野口氏六時過ぎ、暫く振りにて夕食に間に合う。二十六日以来、精励格勤せらる。

昭和14年11月8日（水）

薄雲かかる、大体晴れ。気温珍しく暖かなり。第六十回国債は昭和十一年六月臨時償還、其の後の利札十三枚欠缺に付き、五百円券一枚に対し、一枚6、25、計81、25追徴方通牒あり。

昭和14年11月9日（木）

晴れ。午後三時頃より曇り、四時頃より少雨降り初む。小降りとて傘も借りずに退出す。行賞資料報告方電照あり。提出せぬ積もりなりしも、催促せられて見れば、発送せぬわけにも行かず。美濃型洋紙を求め、四時過ぎまでかかり提出。五時三十分帰宅。風呂に信子のみ残し、他の三児を済ましたところ、余大急ぎにて慌て信子を入れたり。局にて熱き湯を呑みたと、気温上昇の為流汗、身体を拭ふ。入浴後も熱き粥に汗出て、幾度か食事中汗を払ふ。事故金と共にラジオ真空缶代金三円、切手代より支出し貰ふ。野口氏六時頃帰宅。広美より依頼越しあ

り。二拾円別府明礬湯（みょうばんゆ）肩書きにて発送す。皮膚病にて三週間湯治、予定二週間なりしが治せず、更に一週間追加の結果不足を生せし由。

昭和14年11月10日（金）

昨夜七時頃より本降りとなり、夜半歇む。此の朝快晴。赤坊早く起きたり、小母車にて巖と外出、次いで余挽き出し四十分間。朝食を与ひて智子を負ふ、一時間。九時出局。日曜日の事務研究会出席希望者を問ふ。野口氏を永江氏指定す。野口氏不平らし。是永氏行く。余は野口氏の為め、案内せんと思ひ居たるが、遂に裏切りたる結果となり、余も出席せぬこととせり。五時三十分飯宅。電報十一通甚だ少なし。夜冷氣頓（とみ）に加わる、電気炬燵す。債券事故処理方、竹折氏に尋ぬ。野口氏九時四十分飯宅。

昭和14年11月11日（土）

快晴。九時過ぎ智子を負ひ、信子の手を取り歩行せしむ。公報改正慶弔電報取扱規程制定に付き、別に写して電信編中に補綴す。四時過ぎ飯り、両児を小母車に入れて局の前を通過し、金谷より中学校の手前の小道を左折、船町を経て飯宅。此の時小母車の胴を支える心棒を折断す。六時飯り食事を摂らす。夜智子を負う、眠る。愛子は信子を負うて外出、九時過ぎまで飯らず。反物か洋物店を漁れるものと推断す。果たして子供の品物の為に純綿を選び、足袋、メリヤスズボン下等を求め来る。何れも昨年より頗る割高となり居れり。中島氏より電報開始掲示立て看板の必要なる旨、注意あり。丸久広告板を借用、掲出す。双葉山細君と先日来帰省、亡父の供養を済まして

此の日上京。見物人帰郷当時よりも鮮少なるも、可なり多数停車場に詰掛けたる如し。局の連中も皆出掛け、何事かと思ひぬ。電気炬燵す。

昭和14年11月12日（日）

耶馬溪にて研究会、是永氏午前七時出発列車。野口氏に次いで余出局。電話書類差立ての準備をなす。販りに味付け南京豆を買はせたるに、なしと云ふ。菓子を買はせ25、兩人にて喰ふ。永江氏来客にて通知せず。二時販宅。途中風呂屋前理髪屋にて顔剃り20。両児を小母車に入れ金谷古町まで行く。真棒を折りしは此の日なり。四時販宅。巖松江の山に茸狩りに朝吹氏と行く。忙中閑有りと云ふ。余は夫れは意味が違う「心構えのことだ」。五時半頃販り、松茸、初茸シメジ等相当数量採り来る。風呂沸き両児入れ、夜も守りす。巖森山氏を批難す。秋吉の息、出征の為、賜暇帰省、愈々明朝出発に付き、部落民は一戸一名駅まで見送れと云ふ森山氏の意見に対し、過去の不敬事件を繰り返して云ひ為す。余、巖に注意す。

昭和14年11月13日（月）

夜半より冷ゆ。午前七時秋吉氏を駅まで歓送、家の前にて万歳三唱の声を耳にし、赤坊の為に外出す。和博、巖の自転車に乗り駅まで赴く。晴れ。記念切手二銭四銭各100、拾銭貳拾銭各五枚割当て丈け請求。余二銭20枚、四銭50枚貰ふ。十五日より売出すもの。此の日急に寒さ加わる。火鉢に火を滅さず。此日逡信局報、飯塚山本護51、中津大西渉43、後藤寺名倉ツル42、依願免本官10、30。書記松永義男、後藤寺主事心得11. 1。五時半

飯宅、子守りす。巖余より遅れて飯る。夕食は茸飯。野口氏七時飯る。愛子勉（つか）はり沢山食べよと云ふ。

昭和14年11月14日（火）

朝寒冷。余水浴中、信子起床、体操中余の部屋に来る。朝食後愛子より信子を受け、同様負ふて三十分外出。飯れば智子も起きたり、乃ち朝食を摂らす。再び智子を負ふ。九時出発。五球ナショナル受信機到着。機能を試験するに頗る敏活。鉄道職員の注文主に電話したるに、直ちに出局交付せり。五時二十分飯宅。夕食を赤坊に摂らし、後負うこと前例の如し。此の日四時頃まで快晴、次第に曇り。その為か、此日は夜に至るも割合に暖かなり。

昭和14年11月15日（水）

朝少雨、七時頃歇む。両児朝食は巖と共に摂らす。両児を抱き外出、帰れば巖既に居らず。九時近くまで守りす。曇り、後晴れ。東吉富局長臨局。去年八月再度通帳の上、当局にて金払いのもの、原通帳により東吉富局より三十円即時払いのもの。海老二升80求む。インチ尺15求む。小包に信書封入の件、若津局より通知あり。本通知は中津局に誤送、同局より回送に付き、中津局にて現物到着を看視しある筈。差出人を召喚、事情を咄し、始末書を徴する旨申入れる。五時二十分飯れば、巖子供と入浴。余次いで両児を入れ、食後不相変守りし、八時頃より漸く新聞を見る余裕を有す。汽車時刻表30、本日より改正分。

昭和14年11月16日（木）

朝食後信子を負い智子を抱き、更に和博悦子をも連れ、

三百間を経て、塵埃焼場より戻れば九時十五分。急ぎ出局す。中尾氏来信、中津に来るとあり。葉書にて来ることならぬ、強いて来るなら甚十郎氏に一切を通告すと、強硬に申遣る。柳原先生より十八日午後五時、晚餐を一緒に頂きたしと往復葉書にて申越さる（福岡より移送）。返事認む。市内城西橋とあり。其の儘発送し中津局より注意あり。四時中津局に反則小包着否問合わせたるに、本朝配達済みとあり。明朝係主任の来着まで俟ち呉れと云ふ。その無責任を痛責、早速引揚げ方を要求す。曇天。

昭和14年11月17日（金）

朝少雨、間もなく歇む。朝食後両児を負うて外出、三十分。朝食を摂らせて、後信子を巖に、余は智子を負う。巖も余より不徹底を批難されて、珍しく余出局時、猶負うて居る。松本書記臨局。余逡信局より通牒なければ此の儘止む、通牒あれば遺憾ながら實際を報告すべき旨、念を押す。後刻逡信局より来照あり。即ち差出人より始末書を徴し報告す。外に子女数報告一件あり。電報書類整理、発送し得るばかりにせり。電報書類も前日迄の分を整理す。午後より時々陽射す。薄曇り漲るも、大体霽れ。六時過ぎ戻れば、赤児夕飯済む。此日小母車修理完成。

昭和14年11月18日（土）

朝食後、小母車挽き出し三十分余外出。朝食を摂らす。八時より巖挽き外出。四十五分戻る。此の間、余新聞を閲し九時出発。快晴。広美より葉書「完全に治せぬ、別府の医師の勧告に依り引返す。今少時湯治す」と。十五日より改正の汽車時刻表により、余の出発時刻は午後一

時十分となる。乃ち十分早くなる。汽車は満員、立つ者多し。其の為め各駅にて整理に相当の時間を要し、自然停留時を延長。博多着四時三十八分を五時となる。道子等余の来らぬと疑ひ居たり。上田谷地より柿一筥送り、十五日蓋開けよとあり。七日発送せし如し。到着せぬ故、停車場に質し、久子をして電話にて調べさせ等したるも、何れも着荷せぬとあり。此の夜七時近く配達さる。過半腐敗し初む。斎藤7、正岡5、両家に配布。余此の夜まことの郷会行きを見合わす。戸数割り納税3, 39令書あり。此の日快晴。汽車中にても陽の射す方を嫌う者、雨戸を閉鎖しあるもの多し。団子を頂く。柿数個を食ふ。湯暖房して貰ふ。

昭和14年11月19日（日）

快晴。道子等市場に買物に行く。此日林檎買はず。四つ20。誰も居らぬ間、下帯洗濯す。裸体紫外線を万喫す。此の朝七時、佐世保光子氏来邸。夜半0時過ぎ出発。態々来たりし由、文夫マージャンに凝り不相変油断ならぬと口説く。金子三百円借用方の件なり。巖より電為替??にて送らす様約す。九時道子送りて行き、澄子市場に行き、何も市場に待合わす約束なり。斯くて正午頃飯宅。此の朝海老の煮付け、昨夜の甘藷及び野菜のテンプラ残りにて、光子氏にも振舞ふ。

昭和14年11月20日（月）

快晴。此の朝三谷、武蔵久夫より葉書。柿一箱送ったりと。十七日附けなり。午後三時頃夕飯を済まし、デパート行き仕度す。余には四時近く使います。少し早きも甘藷も出来たれば頂く。八時半を経過、未だ不眠。九時過ぎ

販りし由。コート二十五円余にて玉屋より求め来る。松屋も岩田屋も何れも漁り、多少づつ購ふ。

昭和14年11月21日（火）

天気落ち目となり、雲次第に漲る。余の下奥歯障害、当地に来る日より懸念され、着してから膨脹。噛む時疼痛、左の歯にて咀嚼す。甚だ不自由を感じず。午後より雨模様となる。小屋の中の赤毛布を洗濯して貰ふ。之をカバーつけて局に居る際、膝掛けにせんとす。外套も痛み居るを取出して補修を頼む。野見山八郎氏より朝鮮砂金鉱業株式会社常務取締役、足立一良氏夫妻の媒酌に依り、十一月八日、京城府朝鮮神宮にて結婚式を挙げたる旨、通知あり。妻女の名は松枝とあり。久子早販りのが八時販らず。雨降り初む。余九時五十分頃寝に就く。今朝食べたる海老は猶、胃に停滞しあり。

昭和14年11月22日（水）

朝の間、猶降雨。道子は赤毛線にて編みたる下着を黒に染め直し、ジャケツ編みに精進しあり。午前中三谷発送の柿一箱到着。腐敗割合少なかりしは、到着早き為と思料せらる。終日降雨。巖より葉書に、余の依頼に応じ光子宛三百円電為替送付せり。余裕なき生活云々と勿体つけあり。余之に対し販局、即日余より返済する。光子対私なれば、返すも返さぬも外に迷惑を及ぼさぬと通知せり。羽織紐染め直し。

昭和14年11月23日（木）

新嘗祭。朝降雨、小歇み。十時頃道子市場行き、余も一緒に出掛く。橋の袂で雨に見舞はる。少時歇む。市場

にて鰺25二尾にて50、白玉粉19、神様への蠟燭15つつ二箱30、恰度一円を支出。其の儘販宅。夕飯には、鰺を入れた変わり飯を炊き貰ひしなり。曇天の儘、終始す。上田谷地と三谷へ礼状書く。夕方道子風呂に行く際、投函して貰ふ。昨今暖かく、夜暖房不必要なるも、拵えて呉れるもの故、其の儘入れて寝るが、往々夜半汗をかく。

昭和14年11月24日（金）

後期納税3, 39の内、余二円支出。郵便局に払込みを了せしむ。先?向かいの家に居たる子供二人遊びに来る。母人も後より来たり連れて行かる。九時頃より快晴、珍しき上天気なり。寝巻陽に乾燥す。余の古外套の裏地を古夏服にて修理。小屋に放置の赤毛布の利用に着手。裸体、陽に当たり紫外線を万喫す。偕（さ）?て珍しく終日天気良し、夜も暖かなり。

昭和14年11月25日（土）

曇り、降雨。季節風強し、急に寒くなる。澄子鰯六尾10にて求め来る。野見山八郎氏結婚の通知ありしに対し、祝意を表し手紙出す。官練の北野純一氏にも、同様返事出す。林檎22銭一盛り、痛々しく買わずに戻り、更めて道子に買わしむ。五つ20銭のを求め来る。夜頗る寒し、風も十メートルとあり。可なり強し。八時半寝床、十時まで温まれず。従って安眠し得ざりき。

昭和14年11月26日（日）

寒さに慄え行事を済ます。今朝0時過ぎ眼覚む。再び眠り三時猶早し、風強く、窓の隙漏るる風を塞ぐ為、紙片にて目張りしつつありたるを、何日しか破れ、それが又

風に煽られて振動し騒々し。四時に二十分前起床。便所に五十分計り居り、二階に上がりし時は五時十分。出来上がりたる古外套を被り、急激の寒気を防ぐ。澄子火鉢を出し、木炭まで二階に持込み呉る。独占することの勿体なくして、階下に持行けば、今から火鉢は要らぬと拒む。道子は仕事が出来ぬからと云ふ。再び二階に持販る。今から火は要らぬとは、屎（き）？を除外しての言葉なるべけれど、矢張り其の除外が心苦し。巖より手紙、弁解して寄越す。柳原先生より「まこと」誌、送り越さる。一気に読了。天香師一行、一晚御泊まりになりたる如し。昨夜久子菓子屑一袋持参、鼠が喰べたるやも知れずと云ふ。狗（いぬ）に食はすことの勿体なさに余貰ひ受け、中津に持行くこととせり。古外套は甚だ温かし。天候濃雲重積、時々碧間を縫ふて陽光を仰ぐ。今日久子遅出。膝当て出来上がる。柿拾貳ヶを土産に、此膝当てと一緒に、そして巖方への屑菓子と共に持出す。理髪、髯剃り、形の如くす。シャツ二階探せど見当たらず。兩人風呂に行きたる留守に、長持ちを探してジャケツを引出す。乃ち前の着古しのものと、此のジャケツを重ね着ることとせり。夜、月光冴え皎々たり。

昭和14年11月27日（月）

貳時半起床。昨夕ドン（唐津より携行の儘使用せざりしを、澄子取出し初めて使用せしもの）入れ置きたるが、猶湯沸（た）ぎり、白玉団子熱く煮え居る。四時四十五分出発。駅まで歩む。バスは勿論なく、電車さえ一度も遭わず。新聞は売店閉鎖の為、求められず。小倉にて購う。秋永鶴居局長、当局にて払渡し小為替券20円は、百二十円（通常と小為替に分ち封入）の中より拔取りし

もの加え、書留郵便故、取扱中の事故と認めらる（新柳町振出）。此日快晴、夕方より冷ゆ。広美電報「カンナハ17バンニ電話セヨ」とあり。多分御金の無心と診察す。此日経費、先月分倍加の分を併せ交付の為、拾円は余分になり居る。乃ち十七番に電話25す。果たして拾円貸せと申来る。小為替にて例の明譽湯方に送る。指物師扉修理。巖に例月通り食費やる。

昭和14年11月28日（火）

曇り、時々陽射しあり。電信編訂正書差換えす。ラジオ新規購入希望者、機能を観に来る。試験してやる。午後より寒し。朝両児、信子を負ひ、智子を抱き一時間外出（朝食を摂らせてから恒例となり、これをせざれば泣く）。信子腹が減り悪く、一日三回便通ありとのことに、爾来食事に注意す。午後八時過ぎ、広美野口氏に案内されて来る。曩に電報あり、野口氏待ち迎えに出居る。急行にて到着。湿疹平癒の由。身体一面、就中両腕斑点痕迹を止めあり。子供等に土産求め来る。前後一ヶ月（一週間医師、三週間温泉）を費やせる由にて、費用百円を要せりと。乃ち温泉一日丹前、木炭、湯銭、食費三円づつ、それでも癒りしを以て、目的を達せるを幸福と思ふべきか。此日風呂沸き、広美態（わざ）と入浴せず。夜、色々咄し十一時を過ぐ。広美、別府の局員の知己より馳走されたるやにて、夕食を辞退す。

昭和14年11月29日（水）

夜半より降雨。黎明に及ぶも時々驟雨あり。朝食後両児を負ひ外出。広美八時二十分、野口氏と和傘を翳して出発。此の頃漸く雨歇む。余九時まで逍遙、出勤す。指物

師、火鉢入れ二ヶ調製350、扉と共に拾円は蓋し廉ならず。貯金五十億突破に、シャープ二色ペン一ヶ送付越す。是永氏に贈呈す。此日N型ラジオ、大長氏に直接発送越せる旨、電話あり。

昭和14年11月30日（木）

朝の内穏やかな天気。巖納税の他より多きを唧（かこ）ち、家計の豊かならぬを強調す。此の朝珍しく赤子兩人を負ふて外出す。初めてなりと愛子喜ぶ。此の間新聞を見る。九時二十分前、巖皈宅す。曇天、時々陽射しあり。寒気急に加わる。朝も手套して体操す。出局後も頗る寒し。